

# つるかめPART II

(2019年6月11日)

鹿屋市立串良小学校長

令和元年度 No.6 校長室だより

## ☆ メディアと学力・体力・人間力について ☆

### 1 メディアに囲まれた生活からの脱却

子どもたちの学力向上や健全育成を図るうえで、最も弊害になっていることは「**メディアに囲まれた生活**」にあるのではないかと考えます。

一日の24時間は、誰にでも平等に与えられているものでありますが、その時間の使い方次第で全く違ったものになると考えます。

子どもたちがテレビやビデオ、ゲーム、ケータイ等に使う時間に、勉強をしたり読書をしたり、様々な体験活動を行うだけで、子どもの学力や人間性も大きく異なってくるのではないのでしょうか。

ある書物の前書きに、「20世紀後半から21世紀にかけて、テレビ、ビデオ、テレビゲーム、パソコン、ケータイなど電子映像メディアが急速に普及し、それに伴って日本の子どもたちの「子ども期の生活」も大きく様変わりしました。その結果、子どもたちの生物学的、身体的発達ばかりでなく、社会的発達、文化的発達にもこれまでなかった変化が起き始めています。」と記されています。また、ある地方都市の教育長は、「食育も、学力も、体力も人間関係づくりも、突き詰めていくと、すべて**メディア漬け**、**メディア依存**に突き当たるように感じます。つまり、現今の教育の最も大きな課題ではないかと思っています。」と述べています。

このようにメディアの問題は大きく、ともすればメディアに振り回されそうになる情報化社会の中で、**メディア機器に冷静に向き合う力を大人にも子どもにも**培い、何よりも子どもたちの心と体の発達を保証することを最優先に考えて**メディア社会に向き合う**ことが重要ではないかと考えます。そして、このことが子どもの学力向上や健全な成長につながるのではないかと考えます。

### 2 アウトメディアの薦め 【2のここの文章は、ある県の県議会議員が議会で質問した内容を引用しました。】

アウトメディアとは、「子どもたちがテレビ、ゲーム、携帯電話、パソコンなどの電子映像メディアに接する時間を減らすこと」を言います。

われわれ日本人はひたすら豊かさを求め、快適で便利な環境を着々と実現してきました。また、テレビ、ビデオ、テレビゲーム、パソコン、携帯など電子映像メディアの発達は、日々の暮らしを多彩なものに変えていきました。

しかし、それと同時に、子どもたちに必要な体や心が人間になるための条件や環境を決定的に破壊し、奪い取ってしまいました。新しい電子映像メディアが登場するごとに子どもたちのメディア接触の早期化、長時間化に拍車がかかり、今や小中学生の半数以上が平日、休日を平均すると1日6時間以上という**メディア漬け状態**に陥っています。2007年の中学2年生を対象にした国際調査でも49カ国の中で日本の子どものテレビ・ビデオを見る時間は一番長いという結果が出ています。

これと同時に、乳幼児期のメディア接触の早期化、長時間化も急速に進んでいます。生まれた時に茶の間にテレビがあったテレビ世代、子ども期にテレビゲームを経験したゲーム世代が子育てを始めた1990年代以降、そうした流れは一段と加速しました。

赤ちゃんの脳神経回路が形成される大切な時期に、授乳しながらテレビやビデオ、DVDを見たり、メールを打ったりしている母親が7割を超えています。赤ちゃんからのアイコンタクトを拒否し、赤ちゃんの脳に強烈な人工光線と機械音の刺激を浴びせかけることに何の疑問も抱いていないのです。乳幼児期からのメディア漬けの子育ては、子どもの体の発達に**マイナスに作用する（言葉の遅れ・コミュニケーション能力の未発達・身体の未発達）**だけでなく、親子の愛着形成に悪影響を及ぼし、そのひずみが**子どもへの虐待にもつながっていく**のです。

子どもへの虐待は、統計を取り始めた1990年から2007年まで40倍に激増しました。そして、今、日本では毎週平均1.0人の子ども（嬰兒含む）が親などに殺されているのです。日本（裏へ）



の子どもたちは今、人類史上かつて無かった「人体実験」の真ただ中に入っています。

乳幼児から高校生まで今や日本の子どもたちは、自由になる時間のほとんどを室内で言葉を発することもなく孤独に電子映像メディアと向き合って過ごすようになりまし



た。まさにこれが「人体実験」です。そして、「人体実験」の結果がもうはっきりと現れてきています。それが子どもの肉体的、精神的な発達不全、すなわち人間としての劣化です。**(ゲーム中毒、ネット中毒、不登校、引きこもり、ニート、無差別殺人、親殺し等の発生)**

外遊びをしない子どもたちの筋力が低下しています。1998年度を最後に文部科学省は背筋力の測定を中止しました。その理由は、背筋力測定をすると腰や背中を痛める子が続出するからという驚くべき理由です。視力も低下しています。2007年には高校1年生の6割が裸眼視力1.0未満という状態です。自立神経の発達にも異常が見られます。朝は体温が上げられず、低体温。午後は体内の熱を発散できません。体温を十分に上げないまま学校に来るということは、脳のウォーミングアップ無しで授業を受けることになり、学力の低下にもつながるのです。

**子どもは国の未来です。決してメディア漬けで壊してはならないのです。** そのためにはメディア漬けで子育てをすることがいかに危険か、子どもたちの成長にどれほどの悪影響を及ぼすかを父親、母親をはじめとした大人が理解することが重要だと考えます。また、出産前、母親がおなかに子どもを宿しているときから考えなければならないことだと考えます。

日本小児科医会では、「2歳までテレビ・ビデオの視聴は控えましょう」など、メディア漬けの子育てを見直すための5つの提言を出しています。



- ① 2歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えましょう。
- ② 授乳中、食事時のテレビ・ビデオの視聴は止めましょう。
- ③ すべてのメディアへ接触する総時間を制限することが重要です。1日2時間までを目安と考えます。テレビゲームは1日30分までを目安と考えます。
- ④ 子ども部屋にはテレビ、ビデオ、パーソナルコンピューターを置かないようにしましょう。
- ⑤ 保護者と子どもでメディアを上手に利用するルールをつくりましょう。

このように、アウトメディアの考え方をしっかりとつことが重要だと考えます。



### 3 まとめ

子どもが“人間”として育っていくためには、**生物学的な発達、身体的な発達とともに社会的な発達、文化的な発達が不可欠**だと考えます。人類が登場して以来、つい、50年ほど前まではそうした発達を総合的に保障していたのは、**戸外で展開する子どもたちの群れ遊び**でした。

体を使い、言葉を使い、集団の中で多様な人間関係を体験する…、子どもたちは群れ遊びの中で、筋肉や立体視力、自律神経などの身体的発達とともに社会的な発達、文化的な発達を遂げて、“人間”になっていました。しかし現在、子どもたちが裸足で駆け回れるような空間は激減し、ガキ大将を中心とした地域の子ども集団はほぼ消滅しつつあります。ではどうするか？手をこまねいているだけでは何も解決しません。**子どもにとって必要なものを作り出すしかない**と考えます。

現在、鹿屋市で力を入れていることは、**地域「子ども会」の活性化**、市子ども会アドベンチャー事業（屋久島訪問等）の開催、青少年育成大会の実施、保護者対象の研修会の実施、鹿屋子ども劇場の実施、文化財に関する体験学習等の実施です。また、小学校区ごとには**「鹿屋寺子屋事業」**、図書館では各種「イベント」等も実施しています。そのほか、集落ごとの**伝統芸能の伝承**、市役所各課やNPO等が子どもを対象とした事業を展開しているようです。（大隅青少年自然の家では各種体験ができます。）

豊かな自然、多様な食文化、地域の伝統文化等を生かした体験活動は、**生命や自然を大切にすることや他者を思いやる優しさ、社会性等を育む有効な機会**だと考えます。ぜひ、子どもたちを**地域活動に参加**させるとともに、家庭での**各種体験活動の推進**に努めていただきたいと思います。

そのためには、メディアとの接触については、**各家庭なりの約束・ルール作りを行ってほしい**と思います。また、このアウトメディアについても保護者を中心に幼稚園・保育園・学級等でも話題にしてほしいと思います。**(「9時オフ=家庭内約束」の推進を)**

**JRCの態度目標（気づき 考え 実行する）**